

## 中陰法要

第3組河野圓城寺 藤井 英俊

先月の「正信偈について」に引き続いて、中陰法要<sup>ちゆういん</sup>についてお話いたします。

『無常<sup>むじょう</sup>の風来<sup>かぜ</sup>たりぬれば すなわちふたつのまなこ たちまちにとじ』

コロナ禍で様々な生活様式や葬儀の形が変わっても、死だけは蓮如<sup>れんにょしょうにん</sup>上人の頃と変わらず突然私たちに訪れます。

葬儀、そして中陰法要と過ぎていく中、あるとき 私の前に座った 高校生の方から『満中陰<sup>まんちゆういん</sup>ってなんですか？』と聞かれたことがあります。

葬儀後の中陰法要に関しては本山の東本願寺出版から『中陰のこころ』というリーフレットも発刊されており、亡き人とのご縁から自らを見つめていく大切な期間であることが書かれています。

しかし恵まれた生活の中では、仏様も神様も、自分の願い事を叶えてくれる、単に都合の良い相手であり、死後も又、遠く離れた場所で都合の良い幸せで過ごしてもらおうと願うだけが一般的な考え方ようです。

決して悪いこととは思いませんが、身近な大切な人の死から自分の生や死を考えることはありません。

私たちは満中陰の満という字を、ガソリントankがいっぱいの時、満タンというように使います。空っぽの私の心に、ガソリンを満タンにするように、仏さま

の願いを少しずつ注入していく事が中陰の期間です。一週目、二週目、そして満中陰となり、いよいよ満タンになって走り出す車のように、私たちも歩み出すわけです。

しかし、満タンにしたはずの私の燃料タンクは穴が開き、少し走ればすぐにまたガス欠になることも知らなければいけません。

今後、何度も何度も燃料補給をしながら仏さまといっしょに生きていきます。

中陰法要でよく読まれるご和讃のひとつに

みだ そんごう  
弥陀の尊号となえつつ

しんぎょう  
信楽まことにうるひとは

おくねん  
憶念の心つねにして

仏恩報ずるおもいあり

と親鸞聖人はおっしゃっています。

「となえつつ」の「つつ」は継続を意味します。

常に、仏さまと歩み続けてこそ、感謝の心も自然に備わっている、と受け取ります。仏さまと共に歩むということは、この私こそがお念仏を称え、聴いていくことであり、それを願われている身として生きることです。

単なる通過点ではなく、大切な中陰法要にしていきたいと願うばかりであります。